

資料

盲導犬に関する認識の変化

—1992年および2001年における小学生から成人までを対象とした調査結果の比較を通して—

石上 智美*・徳田 克己**

今日、社会において盲導犬に対する関心が高まっている。しかし依然として、盲導犬の受け入れ拒否や一般市民の盲導犬に関する理解不足のために困っている盲導犬使用者が少なくない。そこで2001年に、一般市民の盲導犬に関する認識の実態を明らかにすることを目的とした調査を行った。調査回答者は、小学生から成人までの計2433名であった。2001年における本調査の結果と我が国で初めて行われた1992年における認識調査の結果を比較したところ、認識の量に関する変化は全体的にあまり大きくないことが確認された。しかし小学生と中学生に関しては、理解が深まっている傾向があった。また「盲導犬を連れて交通機関や公共施設を利用することができること」などの、盲導犬使用者が社会の中で安心して生活を送るために一般市民が認識しておかなければならない内容のいくつかについては、特に小学生と中学生において理解が深まっていた。

キー・ワード：盲導犬 理解 視覚障害者

I. はじめに

我が国において盲導犬の使用が始まったのは1957年のことである。それから45年が経った2002年3月末の時点では、全国で915名の視覚障害者が盲導犬を使用して生活している（盲導犬情報室，2002 a¹⁾）。盲導犬の実働数の増加に伴って、盲導犬とその使用者をとりまく社会環境は大きく変化している。特にここ10年間においては、マスコミ等による盲導犬に関する情報量が増加し、盲導犬訓練施設関係者および盲導犬使用者による啓発活動が頻繁に行われるようになってきている（清水，2000²⁾；全国盲導犬施設連合会，2001³⁾）。また2002年5月には、障害者の自立と社会参加の促進を目的とした「身体障害者補助犬法」が成立したことから、公共交

通機関、公共施設、公営住宅、ホテル・スーパーマーケット・レストランなど不特定多数の者が使用する施設等では、盲導犬の同伴を拒否することが禁止される（盲導犬情報室，2002 b⁴⁾）。

この法律が制定される以前に出されていた行政機関からの通達や盲導犬使用者団体等の働きかけにより、盲導犬の社会的な受け入れは除々に進んできている（清水・竹前，2000⁵⁾）。しかし、「盲導犬に関する調査」委員会（1999⁶⁾）が全国の盲導犬使用者を対象に実施した調査結果によると、盲導犬を使用している問題点として「入店拒否などで活動範囲が制限される」ことを挙げた者が5割もいることが明らかになっており、盲導犬を有効に活用できる社会になったとは未だ言いがたい。

また、下村・石上・徳田（2001¹⁰⁾）および石上・下村・徳田（2002¹¹⁾）が実施した盲導犬のマスコミ情報に関する研究の結果から、現在のマスコ

*筑波大学人間総合科学研究科

**筑波大学心身障害学系

ミ情報の多くは盲導犬の能力を誇張して、あたかもスーパードッグのように扱っていたり、「犬の感動物語」として情緒的な伝え方をしていることが確認された。石上ら(2002¹⁾)は、このような偏ったマスコミ情報によって、盲導犬やその使用者に関する一般市民の理解がゆがんでしまう可能性があることを指摘している。実際に、近所から「隣に住んでいる盲導犬がほえる」と苦情を言われてトラブルになっているケースや、初めて盲導犬を使用する者が「盲導犬に失敗させられない」と大きなプレッシャーを感じているケースが盲導犬使用者団体等で話題になっている。

さらに望月・徳田(1993²⁾)が1992年に我が国で初めて実施した、幼児・小学生・中学生・高校生・大学生・成人を対象とした盲導犬に関する認識調査の結果によると、「盲導犬は排尿のコントロールが可能であること」や「信号の弁別ができないこと」については、全体的に適切に理解されていないことが確かめられている。また、「盲導犬が視覚障害者を連れて行ってくれる」と誤解している者が全体の約6割もいることが明らかになっている。

このように、盲導犬使用者が誤解や偏見にさらされて盲導犬を使用している状況を変えていくために、まずは一般市民の盲導犬に関する認識の実態を明らかにする必要がある。1992年に実施された望月・徳田(1993²⁾)による調査以降、認識の実態を明らかにする研究が行われていないことから、2001年に小学生から成人までを対象とした盲導犬に関する認識調査を実施した。本稿では、1992年と2001年の調査結果の比較を通して得られた、盲導犬に関する一般市民の認識の量と質における変化の実態を中心に報告したい。

II. 方法

1. 調査対象者

小学校4・5年生(246名)、中学校1・2年生(296名)、高等学校1・2年生(304名)、18歳から66歳までの成人(2150名)を調査対象とし

た。質問紙の回収率は、小学生・中学生・高校生については授業時間に実施したため、ほぼ100%であった。成人については2150部を配付し1587名より回答を得た(74%)。

なお、望月・徳田(1993²⁾)が行った1992年の調査の結果により、盲導犬に関する認識は年齢が上がるにつれて高校生までは深化するものの、それ以降はほとんど変化がないことが確認されていることから、本調査においては短大生や大学生を「成人」として扱った。

2. 調査手続き

調査は2001年5月～8月にかけて行われた。小学生・中学生・高校生・一部の成人(短大生や大学生)については、各学校の調査協力者である先生宛に質問紙を郵送し、授業時間内における調査の実施を依頼した。その他の成人に対しては、調査者による直接の依頼、あるいは郵送による回答を依頼した。調査はすべて無記名で行われ、調査実施後には盲導犬に関する解説文をすべての対象児・者に配布した。

3. 調査項目

調査項目は、「回答者の属性(性別・年齢・所属)」1項目、「盲導犬との接触経験(盲導犬を実際に見たことがあるか、また直接さわったことがあるか)」2項目、「盲導犬に関する情報源(盲導犬のことをどのようにして知ったか)」1項目、「盲導犬に関する知識」23項目であった。なお本調査における盲導犬に関する知識項目のうち、1992年の調査と共通しているのは16項目であった(Fig. 2～Fig. 17にその内容を示した)。

4. 盲導犬に関する知識項目の「合計正答数の平均」の算出方法

盲導犬に関する知識項目の合計正答数の平均とは、1992年と2001年に共通している知識16項目について、1項目の正答につき1点を与え、小学生から成人までの各年齢群の合計得点の平均を算出したものである。後述するFig. 1には、1992年と2001年における合計正答数の平均を示しており、厳密な比較をするためには有意差検定等の統計的な処理をする必要があった

が、1992年の結果の詳細な統計量が不明であったため、本稿では図上での比較のみを行った。

III. 結果と考察

1. 盲導犬との接触経験

盲導犬との接触経験の有無を尋ねたところ、「実際に見たことがある」と回答した者は成人が最も多く53%であり、次いで高校生(33%)、中学生(31%)、小学生(22%)であった。年齢が上がるにしたがって、見たことがある者の割合が高くなっていることがわかる。

さらに、このうち「盲導犬をさわったことがある」と回答した者は、中学生(40%)、小学生(32%)、高校生(16%)、成人(12%)の順に多かった。特に小学生や中学生においては、盲導犬を見たことがあるだけでなく直接ふれあった経験のある者が少なくなかった。具体的にどのような場面でさわったかについては不明であるが、全国的に行われている盲導犬に関する啓発活動への参加などが推測される。例えば「全国盲導犬施設連合会」(2001¹²⁾)では、スーパーなどの店舗を利用して「盲導犬普及キャンペーン」を全国規模で実施している。また、小・中学生の子どもたちは犬に対して親しみをもちやすいため、学校や地域の福祉教育のテーマとして「盲導犬」が取りあげられることが多い。特に最近では、盲導犬訓練施設の啓発担当の職員や盲導犬使用者が学校で話をする機会が増えている(盲導犬情報室、2002c⁹⁾)。2002年4月より小・中学校において「総合的な学習の時間」が本格的に始まったことから、福祉教育のテーマとして盲導犬が取りあげられ、子どもたちが盲導犬と直接ふれあう機会が今後いっそう増えていくものと思われる。

2. 盲導犬に関する情報源

盲導犬のことをどのように知ったのかについて尋ねたところ(複数回答)、年齢を問わず8割~9割の者が「テレビを見て知った」と回答した。

現在、ドラマやドキュメンタリー番組などのさまざまなテレビ番組に盲導犬が登場してお

り、テレビは一般市民が盲導犬に関する情報を得るための大きな情報源になっている。しかし下村・石上・徳田(2001¹⁰⁾)は、テレビ番組の大部分は、視聴者の感動を誘うために盲導犬のことを「何でもできる犬」あるいは「視覚障害者のために頑張っている犬」として取りあげていることを指摘している。つまり、確かにテレビから盲導犬に関する情報を得ることはできるが、その内容にゆがみがある場合、一般市民が盲導犬に関して誤解や偏見を持つ可能性が高いと言えよう。

その他の情報源としては「新聞」や「本」などが挙げられており、各年齢群とも2割前後の回答であった。

盲導犬に関する情報を得る手段として、読書はテレビよりも能動的な姿勢が必要とされる(望月・徳田、1993⁹⁾)。1992年において、盲導犬に関する本を読んだことがある者は小学生が25%、中学生が15%、高校生が33%、成人が19%であるのに対し、2001年では小学生と中学生がともに19%、高校生が14%、成人が15%であった。つまり、2001年では1992年に比べて、中学生を除くすべての年齢群において読書経験者が減っていることがわかる。ここで注目すべきことは、1992年における高校生の読書経験者の割合が他の年齢群に比べて突出して多いことである。望月・徳田(1993⁹⁾)はこの点について言及していないが、1992年の調査対象となった高校生の中には、授業などで盲導犬に関する本を読む機会を持った者がいると推測される。一方、2001年の高校生群ではそのような傾向はみられなかった。したがって、高校生の読書経験者の割合が19ポイントと大きく減少したのだと思われる。

3. 盲導犬に関する認識

1) 認識の量に関する変化の実態: Fig. 1には、1992年と2001年における盲導犬に関する知識項目の合計正答数の平均を示した。

Fig. 1により、1992年と2001年では、認識の量に関する変化は全体的にあまり大きくないことが確認された。ただし各年齢群の平均の差を

比較すると、小学生で1.9、中学生で1.4、高校生で0、成人で0.6となっており、小学生や中学生では理解が深まっている傾向があった。これについては、前述したように、小学生や中学生では盲導犬とふれあう機会が多くなっていることが影響していると思われる。

一方、2001年における各年齢群の合計正答数の平均を比較するために、一要因分散分析を行った結果、年齢によって差があることが確認された ($F(3,2293)=8.7, p<.01$)。さらにLSD法を用いた多重比較を行ったところ、小学生と成人 ($p<.01$)、中学生と成人 ($p<.01$)、高校生と成人 ($p<.01$) の間に有意差がみられたが、他の年齢群の間の差は有意ではなかった。つまり、成人の正答数が最も多く、小学生・中学生・高校生の正答数には差がみられないことがわかった。

2) 認識の質に関する変化の実態:

(1) 個々の盲導犬に関する認識の変化:

① 2001年の正答者の割合が1992年に比べて、年齢2群以上において10ポイント以上の増加がみられる項目 (Fig. 2~Fig. 4): 「盲導犬を連れて交通機関や公共施設の利用が可能であること」 (Fig. 2) については、小学生と中学生において大きな増加がみられた。テレビを通して盲導犬使用者が盲導犬と一緒にさまざまなところへ出かけている様子をみたり、あるいは実際に電車やバスの中で盲導犬使用者を見かけたりすれば、広く一般市民に認識されることになるであろう。

また、高校生においては8ポイントの減少がみられた。盲導犬に関する本の中には、盲導犬使用者が盲導犬を連れて電車に乗る場面や店などに入る場面が描かれているものがある。したがって、前述したように2001年では1992年に比べて、高校生の読書経験者の割合が大きく減少していることが認識の差に影響を及ぼしていると思われる。

「盲導犬がつける器具のことをハーネスと呼ぶこと」 (Fig. 3) については、小・中学生において20ポイント以上の顕著な増加がみられた。

ハーネスとは盲導犬が仕事に身につける器具であり、盲導犬のシンボルでもある。このハーネスについては、テレビ番組などで解説されることはほとんどないが、盲導犬に関する本の中には取りあげているものがある。したがって読書によって得られた認識とも考えられるが、前述したように読書経験者が増えているのは中学生のみであること、また20ポイント以上の顕著な増加であることから、盲導犬とのふれあい経験による影響の方が強いと推測される。

Fig. 4に示した「信号の色が見分けられないこと」については、小・中学生だけではなく高校生においても大きな増加がみられたが、全体的な認識の程度は依然として高くはなかった。この内容は、盲導犬とその使用者を適正に理解する上で重要である。犬は色盲であるため、信号の色を見分けることはできない。したがって、交差点で渡れるかどうかを判断しているのは盲導犬使用者の方である。特に音声の出ない信号機のところでは、周囲の人が信号の色を教えてくれることを多くの盲導犬使用者は望んでいるが、未だに一般市民の多くが「犬が信号を判断している」と誤って理解しているため、このような援助行為にはむすびつかないのである。

② 2001年の正答者の割合が1992年に比べて、年齢2群以上において10ポイント未満の増加がみられる項目 (Fig. 5~Fig. 11): 盲導犬は視覚障害者が使用する犬であり (Fig. 5)、そのために特別な訓練を受けていること (Fig. 6)、またその使用者の心のささえにもなっていること (Fig. 7) については、年代の推移にかかわらず全体的に十分に理解されているようである。

Fig. 8からFig. 11は、盲導犬の特性や役割についての項目であり、盲導犬とその使用者に関する適正な理解のためには必要不可欠な内容である。

「行き先を告げるだけで盲導犬がその使用者を誘導できるのではないこと」 (Fig. 8) は小学生・中学生・成人において、また「郵便ポストがわからないこと」 (Fig. 9) についてはすべての年齢群において増加がみられた。しかしなが

盲導犬に関する認識の変化

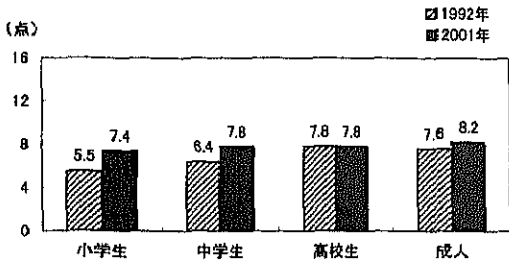


Fig. 1 知識項目の「1992年合計正答数平均」および「2001年合計正答数平均」

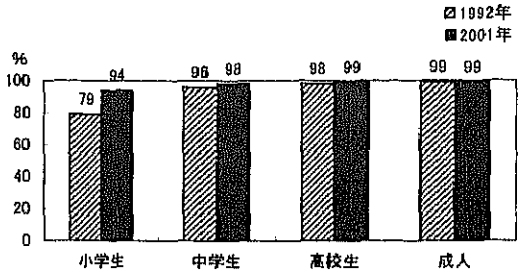


Fig. 5 盲導犬は視覚障害者が使用する犬であることを知っている者の割合

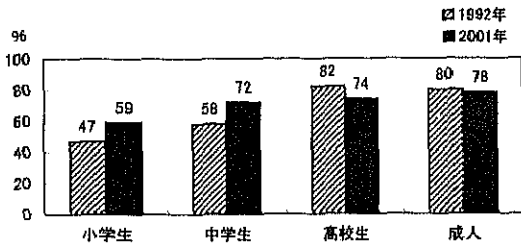


Fig. 2 盲導犬を連れて交通機関や公共施設の利用が可能であることを知っている者の割合

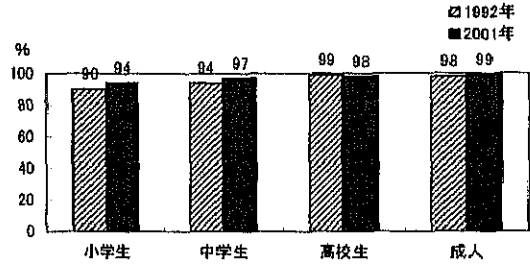


Fig. 6 盲導犬は特別な訓練を受けた犬であることを知っている者の割合

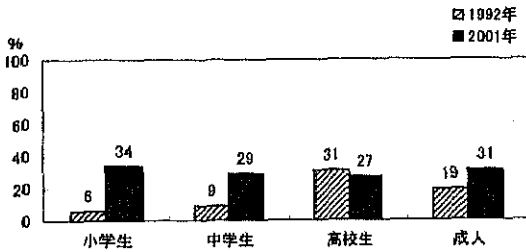


Fig. 3 盲導犬がつける器具のことをハーネスと呼ぶことを知っている者の割合

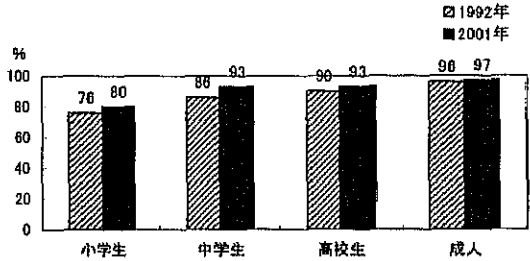


Fig. 7 盲導犬は視覚障害者の心のささえであることを知っている者の割合

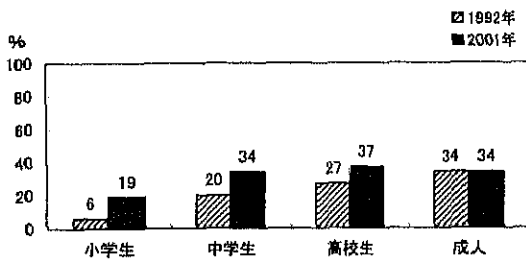


Fig. 4 盲導犬は信号の色が見分けられないことを知っている者の割合

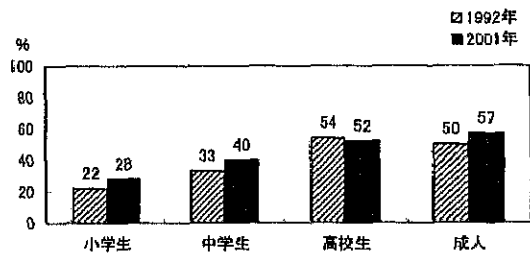


Fig. 8 視覚障害者が行き先を告げるだけで、盲導犬が誘導できるのではないことを知っている者の割合

ら、それぞれについて適切に理解していない者が未だに多いということは、「何でもできる盲導犬像」が一般市民に深く根づいてしまっていることが原因であると思われる。つまり「盲導犬を得たことで歩行の主体となり、自由をとりもどした」という盲導犬使用者の実感が、一般市民の多くに理解されていないと言えよう。

Fig. 10 に示した「盲導犬は許可がないと排泄しないこと」については、小学生と成人でわずかな増加がみられ、また中学生においては 20 ポイント以上の顕著な増加がみられた。盲導犬を実際に見たことがある者のうち、実際に盲導犬をさわったことがある者の割合が最も高いのは中学生であることから、盲導犬とのふれあい経験による影響であることが推測される。また「盲導犬は排泄のコントロールができること」と同様に、「視覚障害者が危険な目にあうとほえて知らせるのではないこと」(Fig. 11)についても十分に理解されれば、盲導犬の受け入れ拒否はさらに少なくなるとと思われる。

③ 2001 年の正答者の割合が 1992 年に比べて、年齢 2 群以上において 10 ポイント以上の減少がみられる項目 (Fig. 12~Fig. 15) : 法律における盲導犬の定義 (Fig. 12)、盲導犬の数 (Fig. 13)、育成費用 (Fig. 14)、種類 (Fig. 15) については、全国の盲導犬協会が出しているパンフレットや盲導犬に関する本の一部には記載されているが、テレビ等のマスコミではあまり取りあげられることはない。これらの内容を認識している者が年齢 2 群以上において 10 ポイント以上も減少しているのは、前述したように盲導犬に関する本の読書経験者が減っているためであると思われる。特に盲導犬の育成費用 (Fig. 14) と種類 (Fig. 15) に関しては、高校生において 30 ポイントもの顕著な減少がみられた。これは、他の年齢群に比べて高校生の読書経験者の割合が大きく減少しているためであろう。

④ 2001 年の正答者の割合が 1992 年に比べて、年齢 2 群以上において 10 ポイント未満の減少がみられる項目 (Fig. 16, Fig. 17) : 「他の犬や猫とケンカをしないこと」(Fig. 16) について

は、中学生・高校生・成人においてわずかな減少がみられたが、盲導犬の受け入れ拒否の問題を改善していくためには認識しておく必要のある内容である。

また「仕事中の盲導犬に声をかけたり頭をなでたりしてはいけないこと」(Fig. 17) に関しては、中学生と成人においてわずかな減少がみられ、全体的な認識の程度は依然として高くはなかった。盲導犬であっても失敗することや家の中ではほえることもある。盲導犬の失敗とは仕事中によ見をしたり、目の前にある食べ物を食べてしまったりすることであるが、それらのほとんどは一般市民のマナーの欠如から起こるものである。またこのような失敗が続くと高度なしつけが崩れてしまい、盲導犬として仕事を続けることができなくなる場合がある。したがって、テレビ等のマスコミや盲導犬に関する啓発活動においては、盲導犬に関するマナーについて必ず取りあげるべきであると言えよう。

(2) 各年齢群における盲導犬に関する認識の変化 : Table 1 には、盲導犬に関する認識が各年齢群においてどの程度変化しているかを示した。

Table 1 によると、2001 年の正答者の割合が 1992 年に比べて 10 ポイント以上増加している項目数は、小学生が 6 項目で最も多く、次いで中学生が 4 項目、高校生および成人が 1 項目であった。また、10 ポイント未満の増加がみられる項目数が最も多かったのは、小学生および中学生であり (7 項目)、次いで成人 (5 項目)、高校生 (4 項目) であった。

このことから 9 年の間に、高校生や成人に比べて小学生と中学生の方が、個々の盲導犬に関する認識がより深まっていることが確認された。

IV. まとめ

本稿では、1992 年および 2001 年に一般市民を対象として行われた盲導犬に関する認識調査の結果の比較を通して、9 年間における認識の量と質に関する変化の実態を明らかにした。そ

盲導犬に関する認識の変化

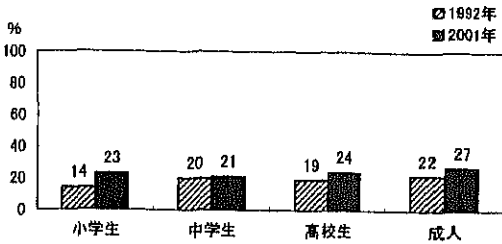


Fig. 9 盲導犬は郵便ポストがわからないことを知っている者の割合

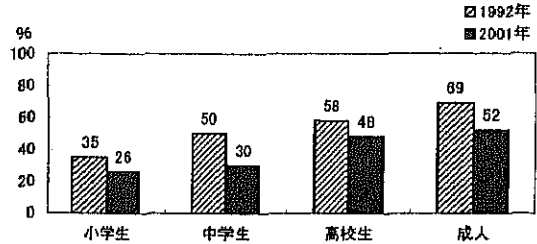


Fig. 13 日本の盲導犬の数はアメリカやイギリスに比べて少ないことを知っている者の割合

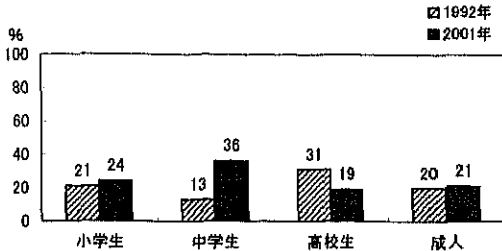


Fig. 10 盲導犬は許可がないと排泄しないことを知っている者の割合

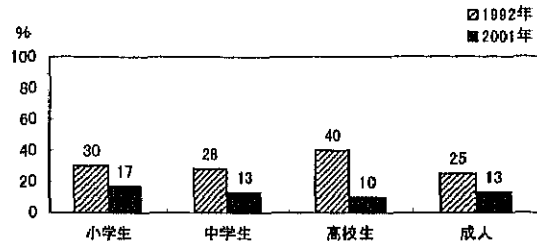


Fig. 14 1頭の盲導犬を育成するためには300万円以上の費用が必要であることを知っている者の割合

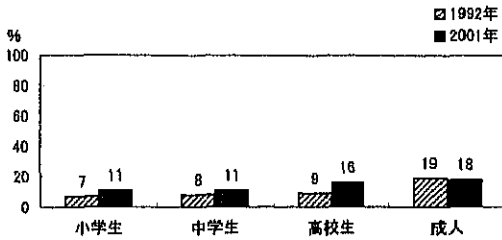


Fig. 11 視覚障害者が危険な目にあうと、盲導犬はほえて知らせるのではないことを知っている者の割合

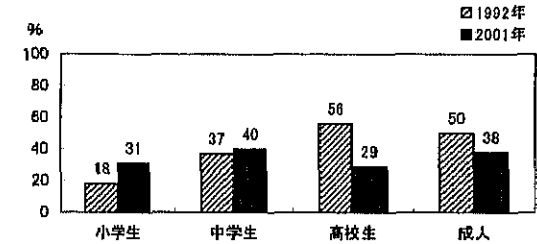


Fig. 15 盲導犬になることができる犬種は2~3種類であることを知っている者の割合

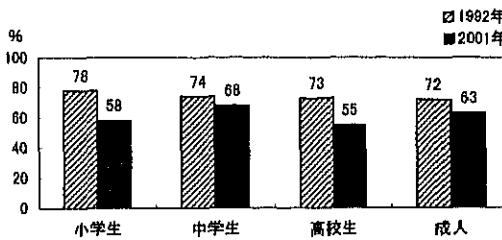


Fig. 12 盲導犬は法律では視覚障害者の身体の一部であると考えられていることを知っている者の割合

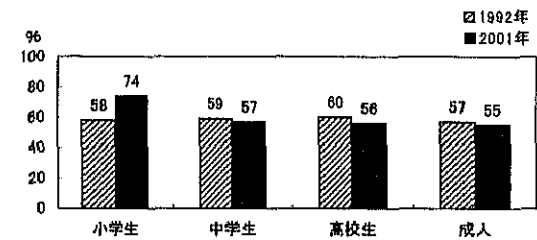


Fig. 16 盲導犬はほかの犬や猫とケンカをしないことを知っている者の割合

Table 1 各年齢群における盲導犬に関する認識の変化の状況

	小学生	中学生	高校生	成人
盲導犬を連れて交通機関や公共施設の利用が可能であること	+12	+14	-8	-2
盲導犬がつける器具のことをハーネスと呼ぶこと	+28	+20	-4	+12
盲導犬は信号の色が見分けられないこと	+13	+14	+10	0
盲導犬は視覚障害者が使用する犬であること	+15	+2	+1	0
盲導犬は特別な訓練を受けた犬であること	+4	+3	-1	+1
盲導犬は視覚障害者の心のささえであること	+4	+7	+3	+1
視覚障害者が行き先を告げるだけで盲導犬が誘導できるのではないこと	+6	+7	-2	+7
盲導犬は郵便ポストがわからないこと	+9	+1	+5	+5
盲導犬は許可がないと排泄をしないこと	+3	+23	-12	+1
視覚障害者が危険な目にあうとほえて知らせるのではないこと	+4	+3	+7	-1
盲導犬は法律では視覚障害者の身体の一部であると考えられていること	-20	-6	-18	-9
盲導犬になることができる犬の種類は2~3種類であること	+13	+3	-27	-12
日本の盲導犬の数はアメリカやイギリスに比べて少ないこと	-9	-20	-10	-17
1頭の盲導犬を育成するには300万円以上の費用が必要なこと	-13	-15	-30	-12
盲導犬はほかの犬や猫とケンカをしないこと	+16	-2	-4	-2
仕事中の盲導犬に声をかけたり頭をなでたりしてはいけないこと	+5	-3	-10	-5

(例) 「+12」は2001年の正答者の割合が1992年に比べて12ポイント増加していることを示す。

の結果、認識の量については、全体的に大きな変化はみられないことが確認された。ただし小学生と中学生においては、理解が深まっている傾向があり、このことは盲導犬とのふれあい経験による影響であることが推測されたが、具体的にどのようなふれあいの場面であるかが不明なため、詳細な考察はできなかった。

また個々の盲導犬に関する認識のうち、盲導犬使用者が社会の中で安心して生活を送るために一般市民が認識しておかなければならない内容のいくつかについては、かなり理解が深まっていることが確認された。例えば、「盲導犬を連れて交通機関や公共施設の利用が可能であるこ

と」や「盲導犬がつける器具のことをハーネスと呼ぶこと」、また盲導犬の特性や役割を示している「許可がないと排泄しないこと」、「信号の色が見分けられないこと」、「行き先を告げるだけで視覚障害者を誘導できるのではないこと」などが挙げられる。特に小学生と中学生において、理解が深まっている内容が多くみられたことから、学校や地域で行われている啓発活動が小・中学生の認識の変化に何らかの影響を及ぼしていることが推測された。しかし盲導犬の特性や役割については、年齢を問わず、依然として十分には理解されていなかった。さらに、盲導犬に関するマナーである「仕事中に声をかけたり頭をなでたりしてはいけないこと」については、中学生・高校生・成人において認識している者が減少しており、盲導犬使用者が日々直面している問題の解決にはつながらない結果と言えよう。

現在においても、これらの内容がテレビ等のマスコミで取りあげられることはほとんどない。また、9年の間に増加してきた学校や地域における盲導犬に関する啓発活動の内容や方法に、何らかの問題点があることが推測される。

「盲導犬にできることやできないことは何か」、

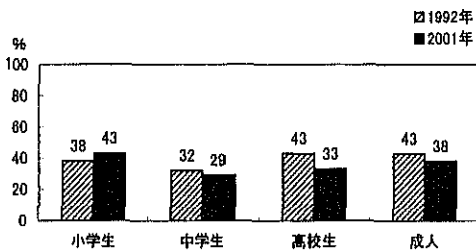


Fig. 17 仕事中の盲導犬に声をかけたり頭をなでたりしてはいけないことを知っている者の割合

また「盲導犬に対して、してはいけない行為はどのようなことか」などを適切に理解することは、盲導犬を使用している視覚障害者の役割や責任について理解することにつながり、盲導犬使用者に対する一般市民の援助行為を引き出すことにもなる。したがって、これらの内容を広く一般市民に対して啓発していかなければならないのである。

前述したように、「総合的な学習の時間」との関連から、特に小・中学生の子どもたちが盲導犬やその使用者と直接ふれあう機会がますます増えていくと予想される。徳田(1995¹¹⁾)は「単に時間と場所を共有するだけでは、障害や障害児・者に関する適切な理解と態度は形成されない」と指摘しているが、盲導犬やその使用者とふれあう機会についても同様である。例えば小・中学生の子どもたちに対しては、「仕事の中の盲導犬にさわったり、食べ物を与えたりしてはいけないこと」や「盲導犬が視覚障害者を連れて行ってくれるのではなく、視覚障害者が行きたいところまでの地図を頭の中に描いており、その地図にしたがって盲導犬に命令を出しながら歩いていること」などをわかりやすく伝える必要がある。しかし、学校における福祉教育の一環として講演を依頼される盲導犬使用者の中には、個人的な苦勞話をしたり、盲導犬のことを美化して伝えたりする者がみうけられる。

そこで今後の課題としては、学校や地域における福祉教育の一環として行われている盲導犬に関する啓発活動の実態を把握し、その問題点を明らかにする必要がある。また、本研究により確認された「一般市民が適切に認識しなければならない内容」と今後明らかにされる「啓発活動の実態および問題点」、さらに徳田(1995¹¹⁾)が提唱している「障害理解の5段階(気づきの段階、知識化の段階、情緒的理解の段階、態度形成段階、受容的行動の段階)」をふまえて、盲

導犬に関する啓発活動としては「誰に対して」「どのような内容を」「どのような方法で」行えばよいかを検討していきたい。

文 献

- 1) 石上智美・下村祥子・徳田克己(2002) 盲導犬に関する新聞記事および書籍の内容の分析. 障害理解研究, 5, 47-52.
- 2) 石上智美・徳田克己(2002) 『盲導犬クイールの一生』の内容分析-障害理解のための読み教材としての可能性を探る-. 日本読書学会第46回研究大会発表資料集, 14-23.
- 3) 望月珠美・徳田克己(1993) 一般の人の盲導犬の認識について-幼稚園児から成人までを対象にした調査の結果-. 視覚障害心理・教育研究, 10, 31-37.
- 4) 盲導犬情報室(2002a) 日本の盲導犬使用者数. 盲導犬情報, 34, 15.
- 5) 盲導犬情報室(2002b) 身体障害者補助犬法成立にあたって. 盲導犬情報, 34, 2-11.
- 6) 盲導犬情報室(2002c) 新しい学習指導要領と盲導犬事業. 盲導犬情報, 33, 12-14.
- 7) 「盲導犬に関する調査」委員会(1999) 『日本財団「盲導犬に関する調査」～結果報告書～』, 日本財団.
- 8) 清水和行(2000) 地域における盲導犬使用者に対する支援ボランティア団体の取り組みについて. 実践人間学, 2, 47-49.
- 9) 清水和行・竹前栄治(2000) 盲導犬使用者の人権侵害に関するアンケート調査の結果についての報告. 盲導犬情報, 24, 2-7.
- 10) 下村祥子・石上智美・徳田克己(2001) 盲導犬使用者のマスコミ報道に対するニーズ. 実践人間学, 5, 37-41.
- 11) 徳田克己(1995) 障害理解の心理. 高見令英・向後礼子・徳田克己・桐原宏行, わかりやすい教育心理学. 文化書房博文社, 203-211.
- 12) 全国盲導犬施設連合会(2001) 平成12年度の主な活動報告. デュエット, 10, 12-13.

**Change of Understanding on Guide Dogs for the Blind :
Comparison of the Results of Surveys in 1992 and 2001**

Tomomi Ishigami and Katsumi Tokuda

In 2001, we conducted a survey aiming at clarifying general citizens' understanding on guide dogs for the blind. This survey obtained the replies from a total of 2433 persons comprising of schoolchildren, junior high school students, high school students, and adults. In this study, it was shown that how general citizens' understanding on guide dogs for the blind has changed in 2001 compared with 1992. As a result, it was confirmed that there was a tendency for understanding of schoolchildren and junior high school students to deepen especially. It was considered the reason for this is that there are more schoolchildren and junior high school students who have touched guide dogs for the blind compared with high school students or adults. It was supposed that the enhancement of the understanding was affected by these experiences. However, general citizens' understanding about manners toward guide dogs for the blind, their characteristics and roles was still at a low level.

Key Words : guide dogs for the blind, understanding, visually handicapped person